SAWADA・COMIX

沢田としき

ガロ

自分の
はじまりが
ガロだったことを
忘れないように
します。
ありがとう
ございました。

大胆にして、涼しい足音

ますむらひろし

もう二十年も前のこと、僕は青林堂の社員として毎日あの階段を上っていった。沢山の返品ガロを階段の下から二階に運び、東販や日販への注文本をより分けるそばで、長井さんは、べらんめえ口調で、いろいろな話をしだす。そして南さんをはじめとした残りの面々が話に反応し、今思うに、あの仕事場が《静かなこと》は、ほとんどなかった気がする。静かな空気が流れすぎたりすると、そうした雰囲気に、気をつかうように話出すのは長井さんだった。

「おおい、ご飯、弁当に詰めてきたからサ。誰か食べない?」と長井さんが言うと、サッと僕が手を上げる。そのうえ長井さんは「これで、おかず買ってきな」と小銭をくれる。こうして僕は何度となく、神保町の惣菜屋から、おかずを買ってきては、弁当を食った。

長井さんのお酒好きは有名だが、酒乱の親父を見て育った僕は、当時〝一滴も〟酒を飲まなかった。そういう事情を知った長井さんは、決して僕に無理に酒を進めたりしなかったが、阿佐ヶ谷の自宅で、美味しそうにスイスイと呑みながら僕にしみじみと言ったことがある。

「増村君ねえ。そういう事情は解るけどサ。酒の味を知らずに一生過ごすのは、もったいないと思うよ。」

本当に美味そうに呑み、酔ってもけして乱れない人の言う「もったいないよ」の声は、今も耳に残っている。

ある時、仕事場でいつものように注文本を集めていると、長井さんが手伝ってくれて、

「増村君、今描いてる『ヨネザード物語』、あれさ、まとまったら本にしような。」

僕は、ドキンとした。

「売れるわけない僕の作品を、単行本にするなんて…。」

嬉しさよりその無謀さに驚き、小さな体の長井さんの中に住んでいる途方もない大胆さを垣間見る気分だった。そして一瞬思ったのだ。

「青林堂が、貧乏なのは…、コレだな。」

〈貧乏〉を広辞苑でひくと〈青林堂〉と載っているあの頃、貧乏であれば保守的になったり、チマチマしがちなのに、長井さんはそんな風情は見せず、こうした〈山風〉のような精神的荒技を時々見せたのだった。

そして日々浸水を続けながらも何故か沈まない、狸の泥舟のような青林堂号の甲板に、乗せても乗せてもあっちこっちの港で奪合いになるという不思議な荷物が現れた。それは、山上たつひこさんの「新喜劇思想体系」だった。

刷っても刷っても消えていく。僕は短い社員生活のなかで、刷っても刷っても増えていくガロと刷っても刷っても消える本という、不思議な2つの魔法を見た。こうして景気の良さそうな風が吹いたとたん、暑い夏を前に長井さんは言ったのだ。

「クーラーを買おうか、それともボーナスにしようか」

即座に僕は

「ボーナス、ボーナス、ボーナス」と、命がけの早送り声で言ったのだった。南さんは大人だから「ボーナス」とは言わず(内心は欲しかったと思う)、かといって激しく「クーラー」を主張したわけではないが、長井さん南さんクーラー派、香田さん中立(内心クーラー派)、残りの面々ボーナス派となり、ついにボーナス派は勝利したのであった。これが世に言う灼熱のボーナス事件である。

こうした時がたっても胸に残るたくさんの「長井さんが僕にしてくれた親切」を、思うたびに

「俺はいったい、何をお返ししたのだろう?」と思うと、胸がズギズギ痛くなる。

正月の新聞で、訃報を知ったとき、ガラス越しの空をぼんやり見ながら、気持ちは沈んだ。

「ああ長井さん、逝ってしまったのか…。何にも、お返し出来なかったなあ」

天国で、今ごろは、美味しいお酒呑んでる長井さん、いつか僕が空に行けたら、青空の上の飲み屋で、ぜひ痛飲のご一緒させてください。最後に僕の国の言葉で言います。

「長井さん、たくさんのご親切や思い出、本当に本当に、おしょうしなっし。」

うん
わかった
一緒に
行こう

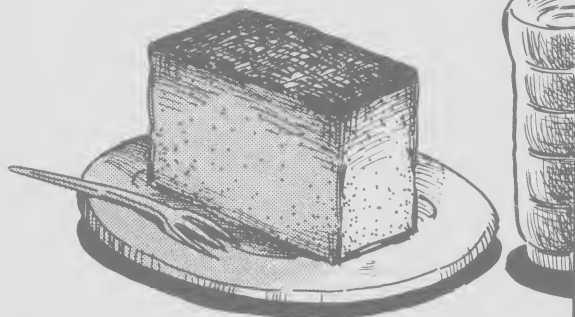
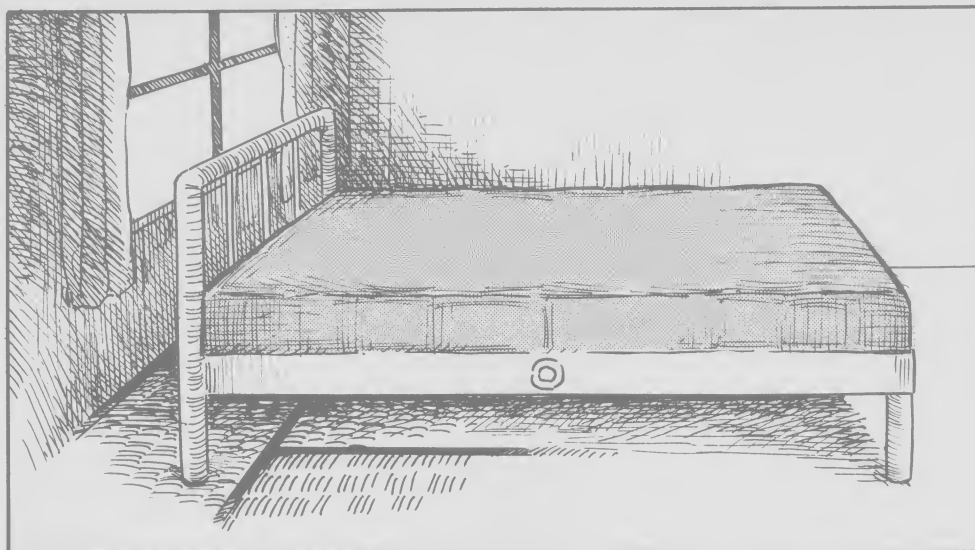
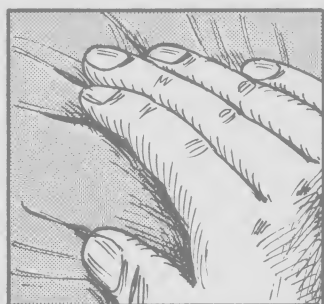
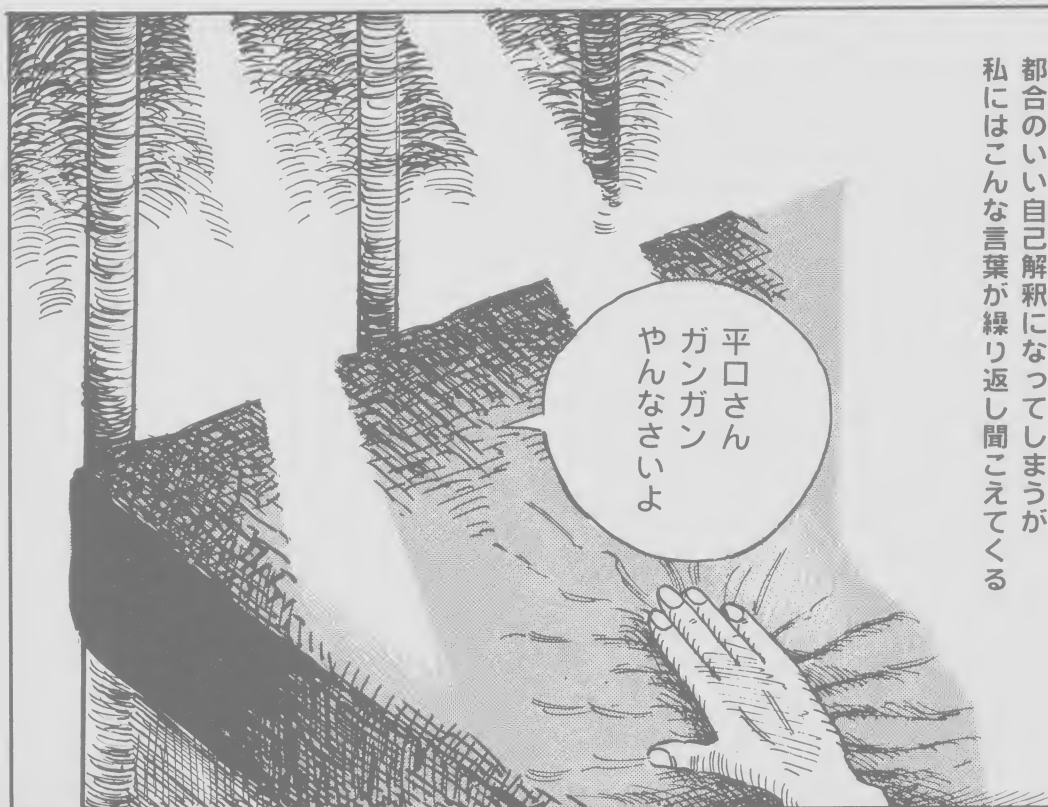
長井さん

平口広美

友人の根本敬からの電話で、エビスと二人でお焼香に行きたいのだが、エビスが途中で笑い出すとマズイので、一緒に行ってくれというのである

我々三人が弔問に伺った時、ちょうど他に客がいない時だったので少しホッとした

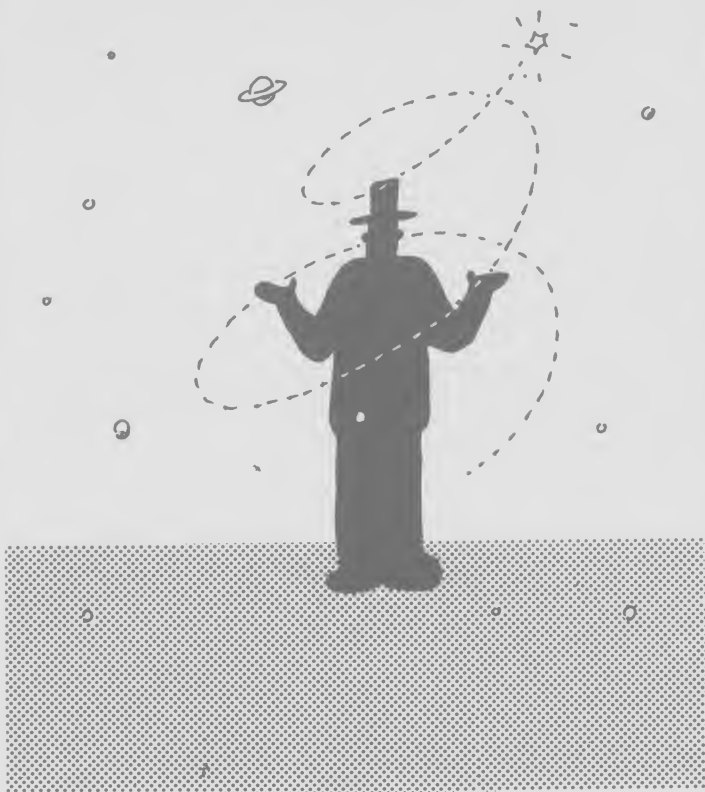
お焼香の後、未亡人の香田さんからカステラやクッキーやお茶をごちそうになる

最近の自分の仕事について、香田さんにキチンと説明出来ないのが歯がゆい

とうとうあきれ逝ってしまわれた
都合のいい自己解釈になってしまうが
私にはこんな言葉が繰り返し聞こえてくる

平口さん
ガンガン
やんなさいよ

おわり

「かすれた声の思い出」

たむらしげる

　最初に青林堂を訪ねたのは、青林堂が「航空ファン」と言う雑誌の二階にあった時だ。そのころぼくは、カートゥーンと呼ばれる「コマ漫画を描きたいと思っていて、そうした漫画を発表できる雑誌がバタバタと消えていく中で、「ガロ」なら載せてもらえるかもしれないと思って作品を持ち込んだ。マジックでガロと書いてある、航空ファンのよりかなり擦り切れたスリッパを履いて二階に登って行くと、小柄なおじさんが漫画家らしき黒いシルエットの男と何やら世間話をしていた。その会話の中でそのおじさんのかすれた声だけが、ぼくの胸の中でざらざらとした、しかし不思議な温かさを伴った手触りとなっていつまでも残っている。結局その時の漫画は不採用だった。

　二度目には青林堂はあの有名な材木屋の二階に移っていた。ストーリー漫画なら載せてもらえるかもしれないと思って苦労して10ページほどの「雨期」という漫画を描いて持ち込んだ。またしてもあのかすれ声のおじさんだ。その頃になってやっとあのおじさんが〝ガロ〟の編集長で長井勝一であることがわかってきた。どうやら長井さんはぼくの漫画の起伏のない淡々とした物語とその簡略な絵が気に入らないらしい。長井さんはぼくの原稿を〝印象深い顔の長髪男〟に手渡した。「ぼくはなかなか面白いと思いますよ。文章もリズムがあって……」南伸坊が言った。でもとうとう長井さんは首をたてに振らなかった。長井さんは頑固なのだ。

　三度めに訪ねた時、編集部にいたのは南さんだけだった。南さんが嬉しそうに言った。「こういう漫画を載せたいと思ってたんです」

　幸運なことにその後ぼくの描いた漫画はすべてガロに掲載してもらえた。原稿を青林堂に届けるたびに長井さんは限定版や虫の標本箱などの高価な本をドサッとぼくにくれた。ズシリと重い無骨な本を宝もののようにかかえて歩きながら次の漫画のアイデアを考えた。

　最初の単行本〝フープ博士の月への旅〟が出た時、ぼくはおそるおそる聞いてみた。「本の印税、まだでしょうか?」そのころぼくは貧乏だったのだ。長井さんはあのかすれ声そっくりにぎゅーっと眼をつぶり、数秒かけてゆっくりとうなずいた。無念そうな顔を見て、その小さな背中に想像以上の重い荷があることがわかった。

　最後に長井さんに会ったのは一昨年の夏、阿佐ヶ谷の〝きすりん〟という中華料理屋の前だ。妻の誕生祝いに家族で食事をして出てくると、長井さんと香田さんが歩いていた。「お元気ですか?」長井さんはぼくの二人の子供を見てちょっと眼を細めてかすれ声で言った。「ああ……この店おいしいらしいね」二言、三言、会話にならぬ話の後そのまま別れたが、そのうしろ姿はすっかり重荷が取れて軽やかに見えた。

　ぼくの子供たちが〝ガロ〟の面白さがわかるようになったら話してあげよう。「昔、〝きすりん〟の前で会ったかすれ声のおじいさんをおぼえているかい?あの人が有名な〝ガロ〟の初代編集長だよ」

長井さんの思い出

我田 大

長井さんと知り合ったのは貧乏学生だった一九六七年頃だったか。青林堂に入り浸っていた友人の松田哲夫君にひっぱられてあそびに行ったのだと思う。それから私もちょくちょくあそびにいくようになった。

そのうち田端にあった倉庫整理のアルバイトなどもさせてもらった。日当はマンガの本を八掛けの計算でもらって、もうかったような気がしたことを覚えている。仕事が終わって会社に帰ると、長井さんが「フロ行こ」というので、みんなで銭湯に行った。まだ日が高い神保町の裏通りを長井さんを先頭にタオルぶらさげてぶらぶら歩いた。田舎出で、外が明るいうちから風呂に入ったことなどめったになかった私は、ちょっと恥ずかしいような気がした。人が働いている時にゆうゆうと風呂に行くなんて。風呂あがりにはビールをおごってもらった。うまかった。ついでに思い出した。阿佐ヶ谷で焼肉をおごってもらったこともあった。田舎では、肉といえば飼っているニワトリとか密殺のブタそれに山兎とかキジ・ヤマドリくらいで、それも年に何回かというくらいしか食ったことがなかった。その私に牛の焼肉だった。こんなウマイものが世の中にはあったのかと思った。その近所のタラフクという店は新鮮な魚介類が安くうまかった。またしても山の中生まれの私は驚喜して食った。ここではおごってもらったかどうか忘れた。

それからいろいろもあったのだが食い物に目覚めた私は箱根の旅館で板前修業をしていた。そこに長井さんは青林堂御一行様三〇名くらいで慰安旅行に来てくれた。今は有名になった人も多いメンバーでだった。貧乏で名高い青林堂も当時は余裕があったのだろう。

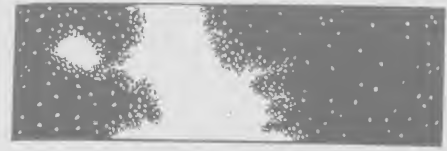
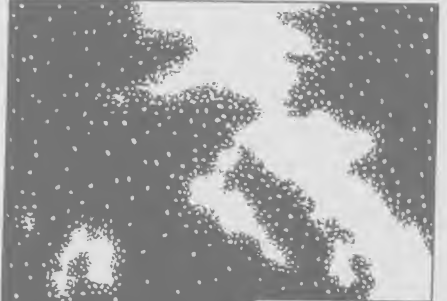
それからまたいろいろあって、私は田舎に戻ることになった。田舎といっても今は新幹線で東京から二時間もかからずに来れるところだが。一応、お別れのあいさつに行った私に長井さんは「田舎にひっこむとシゲキがないからな」と言ってくれた。どういう文脈で言われたのかは忘れたが、それだけを覚えている。それから「ガロ」が毎月送られてきたのだった。そのこと自体が長井さんからの無言のシゲキだった。まあでもじつは、田舎にもシゲキがないどころか、けっこうおもしろいこともあったのだ。野菜や作物、山菜・きのこなどがやたらにうまかったのだ。飲み屋を身すぎ世すぎとしたので暇な昼は、田畑や山にササる（ハマる）ことになってしまった。その話を書いたのは一昨年「野菜がうまい」（筑摩書房）という本になった。長井さんにも「ワガタよかったな」と言ってもらいうれしかった。すこしは「シゲキなし」への返答になったかと思った。店にも一度来てもらい料理を食べてもらったのでよかった。

そうだ、どういうきっかけからだったか、もうかなり前から長井さんには家の米を送って（贈ってではない）食べてもらっていた。新潟の魚沼、中でもうまい塩沢の魚野川左岸、キミザワ・コシヒカリだ。毎年トレ秋になると「またタノムよ」とあの声で電話がくるのだった。それが数年前にはいきなり「オレ、ガンになってよー」だった。あわわ、となって言葉を失った私だったが、長井さんはさすが百戦錬磨の病気のデパート人で、ちょっと風邪ひいたぐらいの感じでさらっと、ふつうだった。

その米をどうも貧乏（?）社員にも現物配給していたらしいのは最近聞いた話だ。

長井さんが亡くなって年をきくと父の世代の人だった。外見はたしかに最初から年寄りぽかったが、話すと友だちのようというか子どものようというかで違和感のない人だった。ずっとそうだった。いばったりやはったりもないし。安心して話せるというか。「タスカリマス」と言っている長井さんの口調は今も耳に残っていますが、気持が助けられているのはこっちのほうだった。

そういう長井さんにひかれて、私のように業界にとくに関係ない人間も、思えば長いことつきあわせていただいたのでした。

長井さんに選ばれて

田代為寛

一九六五年、高校2年の秋、学校の近く、武蔵小山の古本屋さんの店先で、はじめて「ガロ」を知りました。新人作家募集の記事があり、記憶では「個性的なことを第一に選考し、技術的には下手でもかまわない」というようなことが書いてあったと思います。「これはいけるかも」と思いました。ただ、時代劇画が載っていて(カムイ伝)、なんだか「ちょっと違うかも」という感じもしましたが、「絵が下手でよくて、個性的ってことなら、おれにピッタシじゃん」「ここだな」投稿しようと思いました。古本屋さんにお金を払って買って手にした「ガロ」は、ほこりっぽいような、カビ臭いような、昔の雑誌独特のちょっと酸っぱいような、そんな香りがするような気がしました。以来、この臭いが僕にとっての「長井さんの臭い」になりました。

長井さんとお会いした回数は、ほんの少ししかありません。お話した会話の量もわずかです。でも、僕にとって絶対的な人なのは、長井さんが僕のマンガを入選作品として拾い上げてくださったからです。「僕はガロの長井さんに選ばれた才能なんだ」この幻想をコケの一念で抱き続け、今日まで生きてきました。マンガにしがみついて生きてこられた根拠は、ほとんどこの一点でした。

最初に投稿するとき、原稿を二作持って直接青林堂へ出かけました。郵送ということでも良かったのでしょうが、マンガ入門とかいう本などで漫画を投稿するときは原稿を持っていくと編集の人が見て、あれこれアドバイスをくれたり…というシーンが頭にあったからです。青いタイルがはってあった建物だったような気がします。細い階段をのぼりました。緊張して足がふるえ気味でした。「新人募集に応募したいんですが」と言うと誰かが「はい、じゃあ、お預かりします」それで終わりだったと思います。又ふるえ気味の足で階段をおり、振り向きもせずお茶の水の駅へ向かいました。「やれ、やれ、渡した」「こんなものなのかなぁ」「まぁ、こんなもんなんだろう」高校3年になる春休みの平日でした。その時、長井さんが部屋に居らしたのかどうかも知りません。二ヶ月ほどして、入選作品として八月号に掲載します、と書かれたハガキが届きました。「やったぜ!やっぱりおれには才能がある」の思いの数カ月でした。その後、次回作を期待するというお便りを、ゲラ刷りに添えたり、原稿料の現金書留に添えたりして何度かいただきました。でも描けませんでした。大学受験ということもあったのですが、はっきり言って、アイデアが出ませんでした。青林堂へは行きたかったのですが、期待される次回作を持たずには行けず、一年以上が経ってしまいました。

一浪の後、大学が決まった春、やっと次の一作ができ、青林堂へお持ちしました。しっかり認識して長井さんとお会いしたのは、その時が

初めてだったと思います。長井さんは、なにか鼻の奥をくんくんいわせるような感じで原稿を読まれていたと記憶します。それで「ああ、じゃあ何月号に載せますので」そんな感じでした。「又どんどん描いて」と言われてもアイデアが出ず、描けなかったので原稿をお持ちするのは年に一回ぐらいでした。そしてくんくん読んでいただいて、帰るという感じでした。その後「これは!」という傑作は描けませんでした。結論から言ってしまうと、現在も僕は入選作で載せていただいた「宇宙の出来事」以上のマンガを描けていないように思います。でも長井さんは、お持ちした原稿すべてを「ガロ」に載せてくださいました。

　大学は漫研で遊び、卒業はしたものの、そのままぐだぐだと似顔絵や学習マンガで細々と稼ぎを始めました。そして大した仕事もないまま、結婚をしてしまうのですが、その披露宴に長井さんにご出席いただきました。年に一回くらいフラッとマンガを持って行くだけなのに、披露宴でなにか話せと言われて長井さんも困ってしまったろうと思います。でも、マンガで暮らしていくと家を出ることにしたものの、ほとんどマンガの仕事などなかったわけで、出席をお願いできる編集者は実のところ二人ぐらいしかいなかったのです。ご迷惑をおかけしました。申し訳ないついでにスピーチの内容も忘れてしまいました。ただ「すいません。わけわかんない所へ無理に出席お願いしまして。ホント、すいません」と頭の中で考えていたことだけは憶えています。振り返るとそれ以降ガロに持っていくマンガを描けていないのですね。長井さんとも結婚式以後、「木造モルタルの王國」が出るまでご無沙汰になってしまいました。

　正にそれが才能がないということの証しだったのでしょうが、「独創的でおもしろいマンガ」はなかなか描けませんでした。学習ものとかカットなど「マンガ的な仕事」で、かろうじて喰いぶちを稼ぐことはできましたが、長井さんのところへ持っていっても恥ずかしくないという作品は描けませんでした。

　「マンガ的な仕事」も一時休業し、三十歳から七年間ほど、長野の方で木工芸の仕事を試みていた頃、ガロ二十年史「木造モルタルの王國」に僕の入選作品を収録していただきました。それを見ていると、またあの「幻想」が再燃してきてしまいました。「僕はガロの長井さんに選ばれた才能なんだ」「やっぱり僕はマンガを描きたいんだ、マンガしかないんだ」「マンガ家になりたい」

　三十八歳の時、ガロをのぞけば初めて、雑誌社にマンガの持ち込みということをしました。プロレスのギャグマンガで、少し使ってもらいましたが、そうは売れませんでした。一年後、芳文社の古島當夫編集長に拾われ、アットホーム四コママンガでやり直すことになりました。ペンネームも田代しんたろうと変え、絵柄もファミリー向けに作り直しました。一九八七年のことです。少しずつ仕事も増え、なんとか「いわゆる漫画家」のはしくれになることができました。

　一九九二年、長井さんから山中さんに青林堂をバトンタッチされるというパーティーがあり、出かけました。実は「木造モルタルの王國」の出版記念パーティーにも出席はしていたのですが、気後れがして、長井さんにお声をかけられず、帰ってきていました。バトンタッチのパーティーも、面識のない方たちばかりでちょっと困っていました。でもその日は「どうしても長井さんに一言かけなくちゃいけないぞ」と自分に言い聞かせていました。パーティーが始まり、長井さんが入場されました。高信太郎さんの司会で会は進み、しばらくしてなんとなくワイワイした感じになってきました。僕はいつ長井さんに近づいたらいいものか、タイミングをつかめずにいました。その時長井さんの横にいらした香田さんが僕の方を見て、長井さんに何か一言かけられました。長井さんもこちらを向かれました。僕に気づかれたのか、僕の近くの別の方に気ずかれたのか、わかりませんでしたが、「今しかないぞ、ほら行け!」長井さんに向かって歩いていきました。「おかげさまで、なんとかマンガで飯を喰っています」と言うと、長井さんは「良かったねえ。ほんとに良かったねぇ」と言ってくださいました。あと一言二言ことばを交わしたかもしれませんが、ほとんどそれだけでした。その時はもうそれで充分だという気持ちでした。

　でもね、長井さん。僕は「自分はガロの長井さんに選ばれた才能だ」という思い入れだけを頼りにやってきたんですよ。「長井さんが僕を認めてくれている」それが支えだったんです。時間が経つにつれて、世の中にはもっともっとすごい才能がたくさんいて、僕の思いつきの能力なんかは、それほどのものではないんだということもだんだんわかってきました。でもそれじゃあ、やってられないから、「あの時長井さんに選ばれた」という過去を心の拠り所として生きてきました。

　長井さんが現実にはもういらっしゃらないというのは、とても寂しいことです。

「いつか又ガロに載っても恥ずかしくないマンガが描けたら、長井さんにみてもらおう」と思っていました。そういうマンガが描けるかどうかわかりませんが、もう長井さんには見てもらえないのですね。でも、きっと描きます。「独創的でおもしろいマンガ」きっと描きます。僕の心のある部分は、高校時代となんにも変わっていず、そこには長井さんがいつもいらっしゃいます。だから大丈夫です。いつかきっと、期待される次回作、描いてお見せします。

長井さんと、話さなかったこと

村上知彦

　僕が青林堂を初めて訪ねたのは、当時の手帳によれば一九七二年の三月九日らしい。青林堂の住所と電話番号、それに道順と長井さんの名前が書き留めてあるから、その時初めて長井さんにも会ったのだろう。記憶では初めて青林堂に行ったときは、赤瀬川原平さんに連れていってもらったような気がしていたのだが、どうやら一人で、電話で場所を教えてもらって、訪ねていったらしい。

　だからその時の場面も、鮮明な記憶としては残っていない。長井さんとどのような会話をしたのか、何の本をもらって帰ったのか（何かもらったに違いないのだ）、そもそも何のために青林堂を訪ねたのかすら、いまとなっては記憶の闇の中だ。それでも、長井さんとではなく、もっぱら編集部のだれかとばかり話していたような記憶はある。その後、何度となく青林堂を訪ねたが、長井さんとはいつも、挨拶程度の会話しかしなかった。何を話していいか、わからなかったのである。たぶん、長井さんの方もそうだったのだろう。後年、あちこちにまんがの書評や紹介を書いたりするようになってからは、「いつもよく書いてもらって、どうも」と言ってもらったりして面はゆい思いをすることもあったが、当時のぼくはただの、「ミニコミを作って赤瀬川さんのところに送りつけている、関西に住むまんが好きの学生」にすぎなかった。

　それでも、そんな海のものとも山のものとも知れない学生に、長井さんが、親切に接してくれたことは間違いない。あまり会話らしい会話を交わさなかったのも、ぼくの人見知りをなんとなく察しての、長井さんなりの気遣いだったのではないかと思える。だから、もっといろいろ話しておけばよかったというような後悔は感じない。むしろ、そんなふうに接してもらえたことで、ぼくはぼくなりに気軽に青林堂に出入りすることができたのではなかったかと、改めて感謝している。

　初めて手にした長井さんが作った本は、ご多分にもれず「忍者武芸帳」だった。「サスケ」の連載が『少年』で始まる（60年7月）よりは、むろん前だったはずだから、たぶん六〇年か六一年、小学校の三、四年のころだ。『ガロ』の創刊を知ったのは、二号目か三号目が出てからで、白土三平の作品が再録ばかりだったのにがっかりした覚えがあるから、おそらく『忍法秘話』もたいてい読んでいたのだろう。その後、近所に住む二歳年上の白土三平ファンが、毎月『ガロ』を買うようになったので、もっぱら借りて読んでいたのだが、大学に進んだ彼が「まんがを読むのをやめる。ついては『ガロ』も手放す」というので、既刊分をごっそり譲り受け、自分で買い始めるようになったのが六八年の終りごろだったと思う。

　そういうわけで、『ガロ』とのつきあいは長いのだが、当時はもちろん長井さんの存在を意識して読んでいたわけではない。そのころから、いろんな作家の作品のはしばしに登場していたはずの長井さんを、はっきり意識するようになったのは、やはり赤瀬川原平さんや、南伸坊さんが描く長井さんの似顔絵が『ガロ』にしきりに登場するようになった、七〇年代以降のことといえるだろう。とりわけ「カムイ伝」第一部が完結した七一年七月以降は、おそらくは南伸坊の意識的にか無意識のうちにかのプロデュースの下、長井さん自身が『ガロ』の顔になっていった。だから七二年の三月に、ぼくが青林堂を訪ねて初めて長井さんに会ったとき

の印象も、たぶんすでに「あ、似顔絵とおんなじ…」であったはずなのだ。覚えてないけど。

話したことがないぐらいだから、長井さんとゆっくりお酒を飲んだ記憶もない。飲みに行くのは（というか、連れていってもらうのは）いつも伸坊さんや赤瀬川さんとだった。アベシンや鈴木翁二がいたこともある。七二年の六月二十七日。青林堂から、なぜか阿佐ヶ谷の安部慎一宅を訪ねて行って（誰と行ったのだろう?）赤瀬川さんと翁二さんも呼ぼうということになり、駅前のたぶん多楽福あたりで飲み明かしたあげくに松田哲夫さん宅に泊めてもらった。この時も、長井さんはたしか最初からいなかった。（この日のことは、「櫻画報大全」にも出てくる）

初めて『ガロ』に原稿を書いたのは、七二年八月、川崎ゆきおとものけプロ特集の時だった。原稿依頼は、伸坊さんからあったように記憶していたのだが、「ガロ曼陀羅」を読むと、伸坊さんが青林堂に勤めだしたのは七三年と書いてある。でもこのあたりの、川崎ゆきおに始まって、安部慎一、鈴木翁二、花輪和一と続いた作家特集は、たぶん長井さんの企画ではないだろう。ぼくに原稿依頼が来たのも、川崎ゆきおのまんがを当時面白がっていた赤瀬川さんあたりが、ぼくが関西在住ということでなぜか川崎ゆきおと親しいと勘違いして、名前を挙げてくれたものと思われる。じつをいえば、当時はまだ川崎ゆきお氏とはまんがファンの集まりで一度会っただけで、お互いに全く知らないも同然だったのだけれど。

二度目は、七七年九月号に載った小説「あっちこっちで戦争が始まる」。これは間違いなく伸坊さんの依頼で、渡辺和博さんに挿し絵を描いてもらった。このころはもう学生ではなく、大阪のスポニチに勤めていたのだが、なにかというと休みをとって東京へ映画を観に行き、そのついでに青林堂へも顔をだす不良社会人だった。関西のミニコミに原稿を書いたりはしていたが、まだもの書きを仕事にするなどとは、夢にも思ってはいなかった。八〇年代に入って、友人たちとチャンネルゼロを会社にして『漫金超』を出すようになってからは、伸坊・ナベゾの次の世代の手塚さん、斎藤さん、谷田部さんたちと、零細出版社同士助け合いながら、けっこう深くつきあってきたように思う。長井さんには、大阪の写真家・糸川燿史さんの写真とインタビューで、一度『漫金超』に登場してもらったりもした。『ガロ』系の作家たちとの交流も、自然と多くなっていったが、ぼく自身は相変わらず、長井さんとはあまり話をしないままだった。でも、それらのおつきあいの背後には、長井さんの見えないネットワークが、いつも張りめぐらされていたのだと思う。

長井さんとじかに話した実感のある唯一の場面は、新宿・陶玄房での忘年会だか新年会だかの席で、松本充代さんを紹介された時である。何年のことだったか、記憶が定かではないのだが、ぼくが彼女の単行本「ダリヤ・ダリヤ」の解説を書いたことがあるから、その前後のことだったのだろう。若い女性が横にいるときの長井さんの、にこにこと饒舌な様子というのを、話には聞いていたがその時初めて目にして、それで印象に残っているのかもしれない。あの解説はもしかしたら、ぼくが長井さんからもらった、唯一の仕事だったように思えてならない。（担当はたしか白取さんだったのだけれど）

一月六日の早朝、ぼくの父が突然の事故で入院し、十一日の夜に意識不明のまま他界した。葬儀の準備のどさくさのなかで、長井さんの死を知ったので、二つの死がともすればごっちゃになって、あまりきちんと受けとめられないまま今日まで来ている。そういえば父も酒好きだったが、あまり一緒に飲みに行くことはなかった。話好きで、多くの人に慕われていたが、その輪のなかに、ぼくがいることは稀だった。芸術家であり、幼稚園と女子大でお絵かきと美術を教えていた。父の講義を、一度聞いてみたいと思っていたのだが、いまとなってはそれも叶わない。

ぼくは長井さんとは直接、親しくつきあったというわけではなかったが、長井さんの周りに集まる人たちから、長井さんの話はいつも聞かされていた。長井さんが育てた人たちと仕事することで、ぼくも長井さんとつながっていると感じられる。編集者の仕事というのはたぶんそういうものなのだろう。人と人とのつながりが、どこまでも広がってゆくなかに、長井さんの存在は、いつまでも残ってゆくのだと思う。

長井プロダクションで大儲け？

蛭子能収

一番最初に長井さんを見たのは私が漫画を持ち込みに行った日でした。
　私はやっと完成させた18ページ位の漫画を持って水道橋駅で降りるとドキドキしながら青林堂へ向かったのです。
　通りには学生がたくさんいて、この学生達が皆漫画を描いているとしたら私の漫画なんて絶対受かるわけないだろうなーって思いながら。
　目ざす青林堂は材木屋の2階にある小さな事務所でした。考えていたより、かなり小さくてドアを開けやすい感じがしました。それでもドキドキしながらドアを開けると何人かの社員と長井さんがいました。
　ガロで名物男になっていた南伸坊さんもいてニコニコ笑って私を中に導いてくれたのです。私は長井さんの隣りの椅子に座らされ、長井さんが私の持ち込み漫画を見ました。
　長井さんの前の席には香田さんという女の人がいて、この人が長井さんの恋人のような人というのはずっと後で知りました。
　長井さんは背が低く、細くて、ずいぶん小さな人だなーと思いました。
　私はキョロキョロと本棚を眺め、白土三平や水木しげる、つげ義春、赤瀬川原平、安部慎一、鈴木翁二、湯村輝彦、林静一さん等の背表紙を見て、こんな小さな人がこんな偉大な漫画家達の育ったガロを創ったんだなーとしみじみしていると、長井さんは読み終わった私の漫画を机に置いて、ずいぶん大きな声で「絵がだめだね」と言いました。
　私もそのことは言われるかも知れないと思っていたので、ショックは受けませんでした。で、「そうですか」と言って漫画を自分の手にし帰ろうとしたら長井さんが「また描いて持って来なさいよ、ストーリィは面白いんだから」と言ったのです。
　実は私はストーリィに賭けていたものですからその一言は嬉しかったのです。
　それから三ヵ月程して2作目を持ち込みました。それを長井さんが読んでくれて「うーむ」と暫く考え「じゃこの原稿預ります」と言ったのでした。「預ります」この一言は一体どういう意味なのか分かりませんが原稿をその場で返されるよりは期待できます。「よし入選にしましょう」という一言ならもっと嬉しかったのですが「預ります」でも十分嬉しかったですね。
　そして私が帰ろうと立ってドアを開けようとした時に、真に決定的な嬉しい言葉が出たのです。私の背中ごしに、
「蛭子さん、漫画がガロに載ったとしても原稿料は暫く払えないんですよ、それでもいいですか？」と。
　私は、この一言で入選を90パーセント確信しました。そして振り返って私はニッコリして長井さんに「はい」と答えたのです。
　そして約一ヵ月後に私の漫画は初めてガロに載りました。載るだけで嬉しいのに、お金貰おうなんて気は全くなかったのですよ。
　しかし長井さんは、ただ道楽で好きな漫画家を集めてガロを出している芸術家っぽい考えを持った人ではないと私は思っています。
　長井さんはれっきとした商人で漫画雑誌でいつか大きく儲けるんだと考えていたのだと思っているのです。
　ただ、集める漫画家を失敗しただけです。
　実は私が34才の頃。サラリーマンを辞めて漫画家になろうとした時に長井さんと二人で水道橋の路上を歩

いていると、長井さんが私にこう言ったのです。

「青林堂もなかなか経営状態が良くならないけど、僕は蛭子さんで儲けさせてもらおうと思ってるんだよ」と。

私は意外なセリフを長井さんから聞いて、その意味を計りかねました。果たして冗談を言っているのか、でも顔は真剣でした。

私の漫画で儲けるなんて一体どういうことなのか？ 私の漫画ってそんなに売れるのだろうか？ なんて、うっかり私も目の前にお金がチラつくではありませんか。しかし自分の漫画がドラえもんみたいに売れる訳もなく、「いやー社長、それは無理ですよ」とテレながらも真剣に言葉を返してしまった私が、今考えると恥ずかしいです。

しかし今、私は漫画では売れなかったけどテレビに出て自分のキャラクターで十分すぎる程食えるようになってしまったのです。

実は長井さんは私に言ったのは別に漫画って限って言ってるわけではなかったのではないだろうかと思っているのですよ。

長井さんにとって大きな目標は儲けるってことだったんではないだろうか。しかし漫画という媒体しか思いつかなかった。また漫画家に知り合いができて離れられなかった。等の理由で漫画から抜けられなかったのだと思います。

本当は吉本興業みたいに芸能プロダクションを創りたかったのだと思う。だったら私は長井プロダクションのタレントになっていたでしょう。根本敬さん、平口広美さん、ひさうちみちおさん、みうらじゅんさん、南伸坊さん、渡辺和博さん、内田春菊さん、荒木経惟さん、湯村輝彦さん、糸井重里さん、林静一さん、安部慎一さん、鈴木翁二さん、と皆、長井プロダクションのタレントになっていたと思います。そうなっていたら漫画よりお金儲けができ、毎年一回ハワイとかオーストラリアとかに海外旅行ができていたでしょうに。

このたび長井さんは死んでしまいましたが本当に感謝しております。そういえば長井さんは香港旅行が好きだったと聞きます。私も香港が大好きです。長井さんの魂がビクトリアパークに登って百万$の夜景を楽しんでいることでしょう。私もそのうち香港に行って香港の賑やかな夜景を見るつもりでいます。

「親分」に、合掌。

根本敬

長井さんとの思い出で、一番忘れられない話をこの際だから書きます。

今から14～5年前、デビュー後1年位の時の事です。

私は漫画の中で登場人物が寝ている布団の柄に「差別用語」を用いました。

1センチ四方の絵の中に、ミミズの這った様な汚らしい文字で、考えつく限りの差別用語が描きこまれ、よっぽどじっくり見ないと何ンなのか解らない様な代物です。

それを部落解放同盟より指摘され、それからしばらく、ちょっとありました。

正に不徳の致すところで、弁明の余地はありません（が、これを機に部落問題に関心を持つ様になる等、この事は今となっては宝の様な、得難い経験です）。

長井さんも同盟より連絡を受けるまでは全く気づかず、寝耳に水といったところでした。

文書などで幾度かやりとりをした後、長井さんと私と、当時担当の谷田部さんの三人で同盟の本部である六本木の松本治一郎記念館に赴きました。　こんな事でなければ、さぞや居心地が良いだろうと思われる立派な応接室に並んだ、私たち三人は各々鶏ガラの様に痩せこけ、また、どこから見ても貧乏そうでしたので、立派な室内とのコントラストが妙でした。

帰り道、丁度昼どきでしたので、長井さんが「飯でも喰ってくか」というので三人で食事をしました。が、場所柄、入った店はちょっとしゃれていて、長井さんと私と谷田部さんの顔ぶれで身を置くにはそぐわない所でした。

そこでハンバーグランチ（店はきどってても出てくるものはキッチンジローと同じ）を注文したわけです。私はすぐにナイフを置き、右手にフォークを持ち、いつも通りに食べたのですが、長井さんは最初から最後までナイフとフォークでキチンと食べてたのが印象的でした。

「差別落書き」が問題化してから、私は幾度となく長井さんにお詫びしましたが、最低「何やってんだこの馬鹿」ぐらいの事はいわれてもいい様なもんですが、遂に長井さんは一度もこの愚かな私を叱りませんでした。

それどころか「せっかく今、勢いがあるのに、こういう事があって委縮しちゃって描けなくなる方が問題だよ」という様な事をいって励まして下さったのだから有難いものです。

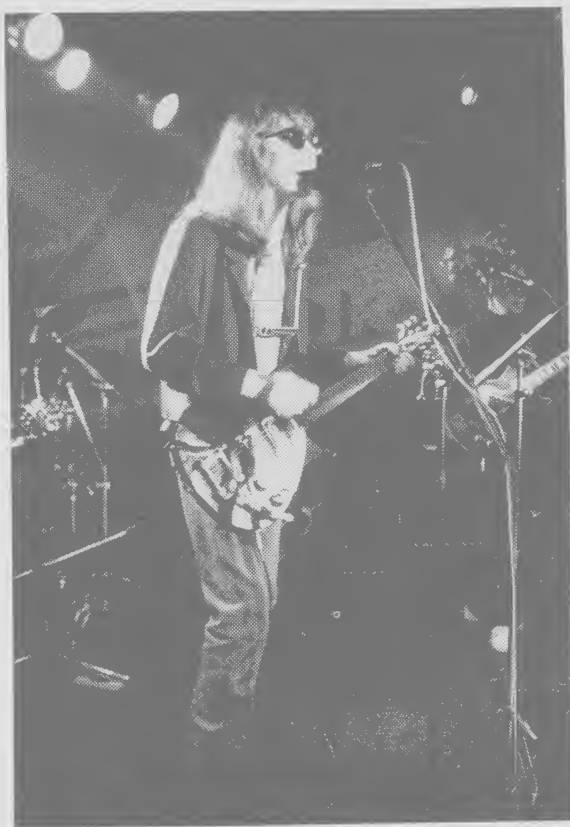
で、その後、私は委縮するどころか、更に増長した漫画を描き、今日に至るというわけですが、あの時、長井さんが「この馬鹿野郎！」と私を怒鳴っていたら、打たれ弱い私は確実に失速し、そのまま消えて行ってたかもしれません。その辺を見越していて、長井さんは私に叱るどころかひと言も文句をいわなかったのだと思います。長井勝一は漫画よりも人を見る、といわれるゆえんです。

長井さんは「編集者」という肩書を世間に対して背負ってましたが、どうも実像とそぐいません。正しい肩書は「親分」ではないでしょうか。

「ガロ親分」の御冥福を祈ります。合掌。

描けなくなるえが問題だ…
回収されたガロの山
谷田部さん
長井さん自ら断裁したガロ

長井仙人

みうらじゅん

その時点でボクは、長井さんに百歳ぐらいのイメージを持っていた。
まだ一度も出会った事がないが、この世に仙人がいるのなら、たぶん長井さんのような人だと思ってたからだ。
その日、ボクは不安な気持ちいっぱいに、青林堂の、あの急な階段を昇った。
「担当が今いないので私が見ましょう」
国分寺のアパートを出る前、青林堂に電話を入れた。
「今日は渡辺さんはいませんが――」
持ち込み漫画を半年以上見てくれていた渡辺和博さんが、今日はいないという。
ボクは少し悩んだが、今朝出来上がったばっかりの漫画を早く見てもらいたくて仕方なかった。
〝絶対、今度こそはガロに載せてもらう！〟
ボクの美大生活の後半はそのことだけで頭がいっぱいだった。
「誰か他の者でも良かったら拝見させてもらいますが――」
編集部の人に言われ、ボクは原稿を封筒に入れアパートを出たのだ。
「まぁ、そこに座って――」
編集部の奥、窓側に座っておられた長井さんが立ち上がった。
何かとっても気まずい雰囲気が編集部に流れ、ボクは指定されたとっても安定の悪い木の椅子に腰を下ろした。
渡辺さんしか知り合いのいないボクは、言葉の全く通じないアラブの酒場に一人で入ったような気がした。
「飲みますか？」
長井さんはコーラのボトルをボクに見せ、そう言った。
「暑いですねぇ」
ボクはヒョウ柄のTシャツに黒のスリム・ジーンズ、白いロンドンブーツをはいていた。
「はい、これ」
湯呑茶碗にコーラが三分の一ぐらい入っていた。その妙な少なさも気になったが、コーラが入っていない部分が茶渋で真っ黒になっているのが分かった。
「見ましょうか？」
「は…は…い」
真夏の昼下がり――
遠くでセミが鳴いていた。そして下の材木屋からは木を切る音。まるで、はっぴいえんどの詞の世界。時

コーラ飲みますか?

は止まってる――。
「はい」
　長井さんは長い沈黙を破って、ボクに顔を向けられた。
「あなたは〝カムイ伝〟を読んだことがありますか?」
　いきなりだった。
　その時、持ち込んだ漫画は多分、マツタケがチンポになる話。
　ボクは真っ赤になってゆく自分を知った。
「〝カムイ伝〟は全巻持っています。大好きです…」
「そうですか」
　長井さんは妙な間を空けて、
「そんな漫画を描きなさい。いっぱい練習して」
　何と答えていいのか分からないボクは、またアラブの酒場に一人でいる自分を感じた。もう立ち上がるしかない――。
「じゃ、また来ます」
「あぁ、来て下さい」
　ボクはあの急な階段を転がるように降りた。とても恥ずかしかった。自分の父親にふざけた行為をみつけられたみたいに、とっても恥ずかしかった。漫画で食いたいなんて思ってた自分が、とてもバカに思えた。

　何年かして初めての単行本を青林堂から出してもらった時、編集部で長井さんを見た。
「あ、どうもありがとうございます!」
「あぁ…」
　あの時のボクだなんて全く気がつかない風の長井さんは、またあの窓側の席で仙人のような表情をされていた。
　ボクはずっと長井さんを仙人だと思っている。だから今でもどこか前人未踏の山から投稿者を見守っておられるに違いない。

長井さん

丸尾末広

自分が最初の本を青林堂から出版した時、「丸尾末広」の名を知ってる人なんてほんの一握りでした。その頃長井さんがインタビューで今一番好きな漫画家として僕の名をあげて下さったのが、とても嬉しかったです。

長井さんと一番最初にお会いしたのは、十九才の時です。軽く書いたいいかげんな作品を「ガロ」に持ち込み、長井さんに見てもらいました。それから二十四才でデヴューするまで一本も漫画は書きませんでした。

その後青林堂から本を出版するとは夢にも思いませんでしたが、長井さんとは十回ぐらい会っているでしょう。

一度もじっくり話した事はありませんでした。

ステキなオヤッさん

遠藤ミチロウ

長井さんは、ステキな、オヤッさんだった。ボクは初めて、直接お会いしたのは、確か13年前。ボクが、〝ソノシート付きマガジン〟というのを出したとき、大先輩である〝ガロ〟の編集長、長井勝一氏にインタビューを申し込んだ。快く引き受けていただいたインタビューの中で、「こういう雑誌はね、5号出してからスタートなんです。それまでは準備体操みたいなもんです。それからが、ますます大変ですけどね…」（ホッホッホッホッ）と付け加えたくなるような笑顔で話してくれた。本当に素敵なオヤッさんだった。

その後、皮肉にも、情けなくも、ボクの雑誌は5号でストップしてしまったが、つくづく長井さんの〝ガロ〟にかけた情熱には、あこがれてしまうのです。

今さらながら、ありがとうございました。

御冥福をお祈り申し上げます。

長井さんの想い出

森　雅之

「ガロ編集長」の中、鈴木翁二氏の部屋に入りびたっている弟を連れにきて、ミイラ取りがミイラになってしまった姉、という記述がありますが（事実はまるで違うのですが）、その弟というのが私です。もう20年近く前になるでしょうか、上京した折、鈴木さんに連れられて青林堂へ行った事がありました。（何かお金の用事だったと思います…）

その時鈴木さんが「これも漫画描いてるんだ」と長井さんに僕を紹介してくれました。長井さんは「そう」と言って、出たばかりの手塚復刻本一冊と、本のケース一個、くれました。もちろんそれも嬉しかったのですが、実物の長井さんに会えたという事が、何よりの喜びでした。北海道の田舎育ちの私は、ジーパンをはいたおじいさん（失礼！）を見るのも初めてだったので、その事も強く印象に残っています。長井さんにおめにかかったのは、その一度だけです。

一度だけでも会う事ができた、いや、その優しい顔を見る事ができたことを、今、本当に幸せな事だったと思いかえしています。

どうぞ、安らかにお休み下さい。

一九九六年二月十四日

「ガロ」や長井さんに関して

とま雅和

自分が初めて『ガロ』に作品を投稿したのはメルヘンタッチのファンタジーシアタでした。この作品は精一杯没頭して創り上げたのですが出来ばえや手答えはあまりいいとは思わなかった。しかし当時の自分はこれが限界でした。

自分の作品の力試しというのもあったからワクワクしながら投稿したのです。しばらくして作品は返って来ました。長井編集長直筆の批評が入っていたので門前払いじゃなかったことが慰めです。

「作品拝見しました。なかなかユニークで結構おもしろいのですが、このような作品は絵が上々でないと無理です。もっと絵を勉強してください」これが長井さんに初めて貰った批評です。自分の柄や質からいってもメルヘンタッチは下手な横好き。好きだけど。

作品はボツになったけれど、長井さんと係わりを持てたことや『ガロ』に1回でも投稿したことの事実が嬉しかったです。

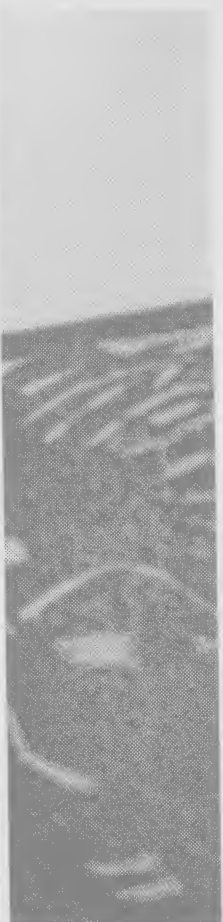
長井さんありがとうございました。ご冥福をお祈りいたします。

長井さん

友部正人

◆この詞は友部さんが長井さんの訃報を知り、書き下ろされたものです。

はじめてガロを読んだのは
永島慎二の特集号
でも長井さんのことを知ったのは
ずっとあとになってからのこと
いつも吉祥寺までやって来て
ぐゎらん堂で酒を飲んでいた
しばらくお会いしてませんね
長井さん

君はセックスが弱そうだから
大酒は飲むなとぼくに言う
長井さんの大きな声は
今でも耳に残ってる
まさじはいいねえ、とうしろのほうで
いつも歌を聞いていた
しばらくお会いしてませんね
長井さん

つげ忠男がかっこよくって
ぼくらは無頼を気取ってた
材木で目隠しされた青林堂は
そんなぼくらのあこがれの場所
床に積み上げられたつげ忠男
持って行っていいよ、と一冊くれた
しばらくお会いしてませんね
長井さん

変装好きの男の子が
大人の世界にやって来て
おじいさんのふりをしているうちに
いつのまにか年をとった
若い人と一緒にいるとき
長井さんがそんな風に見えました
しばらくお会いしてませんね
長井さん
どうやら変装したまま死んじゃった

コ・サムイより愛をこめて

高杉 弾

TO SEIRINDO "GARO" MAGAZINE, TOKYO, JAPAN

SOUTH ISLAND EXPRESSSSsss
by BUS　PAHOO PAHOOO

パイカップ。マイカップ。ワンカップ。ユーショーカップ。サワディ
カップ！高杉でーす。too much の日本人ばかりの東京は
遠く離れた南の島よりお便りのことお許し下さい。
日本頭おかしい馬鹿の国とても好きです。はるかに昔
私の心日本ありました。この旅いまとても寒いとき青お
堂長いさん行きましたの知りました。私の心とても寒い
ありますけど大丈夫の長いさんマイペンライ行きました私
思うのこと長いさんの子供みたいの心わがままのサバイディ
人生のこと大丈夫です。
月が満月に出たとき長いさんのこと私は思い出す when I
was young お部屋の上でした。ジンジャー永島私買い
ましたの弁当箱つるみましたの長いさんふるしきコットン
カップ。よく覚えました。長いさん一緒のMr.南さん長い
のヘカーロング長いさん。このた　ひはとても悲しけ
れども大丈夫　夫思います。　それのことです。
みなさん　またそれのこ　とです。思います。
遠く日本で　たべましたときのさざえの
るぶやきアロイマー　でした。日本よい国よい
文化ありますのことだでも　アロイです。文化いろい
ろすばらしいのうち日本まん　が　文化すばらしいと思い
まします。もともとまんがの文化すばらしいとなうこと思います。

ゲッコー

マイペンライ！

●それではお長いさんのごめいふくお祈りしまする私は
"GARO" magazine のいるそのごはえんお祈ります。JAH!
ありがとうございました

from DAN TAKASUGI　14/2/1996

I&I vibration with LOVE!

長井さんに合掌！

長井さんが亡くなった。残念ながら、僕は長井さんには一度しかお会いしたことがない。それはガロに原稿を持っていった時だ。長井さんは僕の筆ペンの原稿をみて、「ペンでかかなきゃだめだね。」といわれた事をよくおぼえている。長井さん自身に対する僕の思い出は、これぐらいしかないが、僕はガロが好きである。マンガをこよなく愛し、現存するマンガ雑誌で一番長く続いているガロの創立者、長井勝一さんに合掌！

スージー甘金

嬉しい思い出

僕がガロとデザインの仕事で係わったのは91年のことで、長井さんが編集のお仕事から身を引かれる一年前のことでした。長井さんの前では緊張してしまい、いつも挨拶程度の会話しか出来ませんでした。電話で、こちらが拍子抜けするような優しい声で対応をして下さったのが、僕にとっての嬉しい思い出です。

原口健一郎

まんがの恩人 長井さん

南端利晴

最初はどんなだったかな？　最後はいつだったんだろう？　と、思い出そうとするんですが、事実がどうだったかは思い出せません。長井さんとお会いした記憶。ぼくと青林堂の関係というと、もちろんそれは本屋と出版社の関係なんですが、長井さんというよりは、斉藤さんであり、手塚さんであり、谷田部さんであり、近年はもっぱら白取さんです。80年2月に、大阪の堺市で女房と5坪のまんが専門店を始めた頃の青林堂のスタッフと、その数年後入社された白取さん、ということです。そして、一介の本屋の顔を覚えてくださって、礼儀正しく「いつもお世話になっております」と声をかけてくださる香田さん。『月刊ガロ創刊30周年記念パーティ』の席で、長井さんのもとへ引きも切らないお客さんを眺めて近寄りがたくしているぼくに、「長井にも声をかけてやってください」と、察したように話しかけてくださったのも香田さんでした。たぶん、その時が長井さんの姿を見た最後だったような気がします。その前年、大腸ガンの手術という大病を克服された長井さんは、にこやかにされているものの、椅子に掛けられたままで、以前よりやはりひとまわり小さく見えました。その時、ぼくはご挨拶せずじまいでした。

思えば、ぼくは書店、しかもまんが専門店として、ささやかにでも青林堂のチカラになってこれたのでしょうか。80年代前半は、お客さんと売上が少なかった分、ぼくと女房はのびのびとわがままな仕事運びをしてきました。ひさうちさん原作の文士劇『実演・不幸』のプロデュースの片棒を担いだり、長井さんにお墨付き（?）を出していただいて『祝「ガロ」20周年風俗見世物販売店』なるイベントをやってみたりと、作家さんも含めた青林堂の人達と楽しく（仕事と称して）遊ばせてもらいました。80年代後半は、お客さんと売上は依然たいしたことはなかったものの、まんが専門店というスタイルが出版販売の世界に根づき、まんが（販売）の高度成長期ということもあって、店をやるかたわら時々依頼される、まんが市場や販売に関する原稿仕事で、おおかたのヒマは潰れてしまいました。90年代前半は、ほとんど遊べなくなりました。まんが専門店を続けていくという選択に「出店」というカタチで踏み出して行きました。そして90年代後半の入口をくぐったところでぼくはいま「経営者」であることに、積極的であろうとしている最中です。

たとえば『ガロ』が20冊売れる店を作りたい――という初期の意気込みは、ある時期達成され、徐々に後退していきました。青林堂が最もつらかった頃、ぼくの店では3～4冊しか売っていませんでした。売る努力をし、売れることに荷担し、売れないときには結局のところ何もできない本屋。良くも悪くも、店はお客さんが作っていくものだと思います。これは言い訳ですが、それに替るチカラは易々と手に入るものではありません。『ガロ』はどうだったのでしょう――長井さんにこんな質問をしたら、どんなふうに答えていただけたでしょう。

長井さんとお話しする機会が少なかったのが残念です。まんがの恩人でもある長井さん。あの材木屋の2階へ上がっていく階段と、窓際の席で机に向かう長井さんの姿を、いまでもありありと思い浮かべることができます。ぼくのつまらない質問は、西陽に舞うほこりのように「……」と漂っているばかりです。

長井さんのご冥福をお祈りします。

【わんだ～らんど】

長井さんと会えなかった自分

阿部幸弘

考えてみると、高校生の頃からだから、かれこれもう20年以上もガロの読者をしている。少年サンデー、少年マガジンはさすがに今は定期購読はしていないので、ガロがいちばん長く買い続けている雑誌という事になる。今まで意識していなかったが、この文を書くにあたって気がついた。マイッタ。

ガロには、何度も脱皮する力があった。白土三平から根本敬まで、同時ではないものの、全部ガロに載ったマンガ家なのだ。しかもそのすべてに長井氏がかかわっており、かつまた現在進行形で新しい作家達と出会っていたのだからスゴイではないか。一人の人間の度量とか、感性の幅の限界を考えると、なんだかクラクラめまいが来そうなくらいだ。

そうだ、これも今ふと思いついた事だが、感性や美意識を小さくまとめてしまわないという事は、ガロから、つまり間接的に長井氏から教わった事のような気がしてきた。評論家というのは、あの作品が良くてコレがダメと、ヒエラルキーを組み立てる作業をするものだと思っている人がいるけれど、そういうのはウンチク家とでも呼ぶ方がふさわしいのでないか。むしろ、できあがっているヒエラルキーに一筋でも亀裂を入れる事ができれば、評論を書くものとしてこんな嬉しい事はない。そう僕は考える。だがそのためには、自分の美意識にこそ、いつも揺さぶりをかけるという、矛盾した作業が必要だ。(青臭い事を書いてしまっているが、追悼の場なので許されたし。)そういう、とてもベーシックな心構えを、長井勝一氏のガロから自分は読んでいたのではないか。今にして、そう思う。

歴史も実績もある雑誌なのに、今までの蓄積にこだわりなく、次々に脱皮する力。舞台裏は、経済的な事情だったりするのかも知れないが、あまり権威的にはならない(なれない?)辺り、長井氏の体質が深く影響しているのでないかと、僕は想像する。

このように思い入れのある人なのに、実は僕は長井氏には会ったことがない。お顔はもう、いろんなマンガ家の作品の中で見知っている。〝一方的には旧知の気分〟という奴で、全国の読者には、そういう人がたくさんいるだろう。僕もその一人に過ぎない。それが去年は、花輪和一氏の裁判の件を通じて、お手紙もいただいた。何かのきっかけがあれば、お会いしていた可能性があるのだが、かすってしまった(変な表現でごめんなさい)。そう言えば、材木屋の二階の青林堂編集部とも、僕はかすっている。一度だけ、本を直接買わせてもらいに伺い、伝説の階段を昇った。その後すぐ、編集部は転居した。

これはファン意識だと分かっているが、かすったのは悔しい気もする。ガロにこうして書かせてもらえるようになるのも、僕の場合、20代からという訳には行かず、「遅れてきた中年」みたいになってしまった。ただ、このかすったというのは、何だか僕自身をそのままあらわしているようで、内心笑ってしまう面もある。何しろ、ガロのマンガも、ガロには全く無縁でオタクなマンガも、あれもこれも(全部とは云わないが)、僕はイロイロ好きなのだ。ガロは好きでも、信奉者にはなれない。だから僕には、かすったので丁度合っているような気がする。

ガロでなければマンガに非ず的な極論を抱く人は、昔より少なくなったようだが、それと似かよった、妙に頑なな気分にとらわれた時は、長井氏の飄々とした風貌を眺めさせていただこうかと思う。